

仮面絶唱シンフォギアX:Zi—0 平成ライダーユニバース

ジュンチェ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2068年、遂に最低最悪の魔王は倒された。そして、平成ライダーの歴史は…否、仮面ライダーの歴史は死に絶えた。

別世界の西暦：シンフォギアを纏った少女たちは戦いを終えそれぞれの日常に戻っていた。しかし、その胸には希望の歌の代わりに祈りが醜く歪んだ新たな呪いが添えられていた。

そして、物語は交わるはずがなかった……。しかし、神様が知らない光で紡いだ歴史は歪んでいく。現れる存在しないはずの平成ライダー… 時の王者。果たして、その先に待つのは

唄え、その歴史を!! 響かせろ、祈りを!! 未来を!!

※時系列XV後

※ジオウは劇場版ルート後（オーマジオウ視点）

※どの小説も皆、我が魔王無双しすぎい！ だから、逆にどうやったら倒せるかを考えた結果始めた話です。

※我が魔王が負けるはずない、最強だもん異論は認めないという方にはお勧めしません。

目次

オーマジオウ討伐／2068	1
XV・after／20XX 前編	8
XV・after／20XX 後編	20
知らなかった想い／忍び寄る影	28
Are you ready?／招かねざる者 I	35
Are you ready?／招かねざる者 II	44
オーマジオウ／XV・after	53

オーマジオウ討伐／2068

……とある時間の2068年

世界は荒野が広がっていた。ありとあらゆる者たちが強大なひとつの『個』たちに挑みにかかり、敗れ去った結果である。もう、文明の芽は二度と芽吹くことはないだろう…死にかけてこの大地は最早、新たな命を紡ぐことすら難しい。湿気も無くカラカラと吹く風…地面も虚しく砂塵を巻き上げる景色がいつから続き、いつまで続くのかは誰にもわからない。

……いや、ただ荒野の崖から眺め続ける強大な『個』だけは別かもしれないが。

「……。」

オーマジオウ。金色と黒金で飾られた鎧を纏う唯一無二なる世界の王…否、最低最悪の魔王。

「…ふむ。」

彼は待っていた……のかもしれない。ただ小さくため息をついたのは、荒れ果てた地がかつて生きていた姿と脳裏で重なるからかあるい別の何かか。今、魔王の心中を察する者は誰もいない……もう自分に抗おうとする者たち大半も平らげてしまった。存外、彼にとっては暇潰しに過ぎなかったのか……

……この直後に起こることさえ

「やれ、また懲りずに命を捨てにくるか。」

【仮面ライダーギンガ!!】

赤茶けて淀んだ空からくる強襲者。マントをはためかせ、未確認飛行物体の円盤を彷彿させる頭が印象的な仮面ライダー……その名はギンガ。オーマジオウを見据え、急降下しながら構えをとるとライドウオッチを起動し襲いかかる!

【スーパー!!】

「はあああああああああああああ
!!!!!!!」
「……っ」

繰り出される格闘の嵐。一撃一撃が人間の骨すらたやすく砕くものだが、オーマジオウはゆつくりと後退りしながら拳や蹴りを片手で祓い続けていき一瞬だけ一步にも満たぬ間合いをとると……

「五月蠅いぞ。」

拳をギンガの腹に無慈悲に撃ち込んだ。まるで、サンドバッグでも殴るように軽い調子で、ドゴツとめり込んだ一撃はギンガを弾きとばし、廃墟のビル群に叩きつけるに飽きたらずぶち抜き、彼方の地平線へ追放せしめる。

……しかし、愚か者はこれで終わりではない。

【仮面ライダーシノビ!!】

「はああっ!!」

次に迫る影は四方から。仮面ライダーシノビ……文字通り外見通りの忍の仮面ライダー。ギンガのやられた瞬間、不意を突く形で奇襲をかけてきた……のだが

「ほう、またこれは懐かしい……」

あまつさえ、幼き日の思い出に浸っている始末。かかってきた先頭の分身をいなして踏み台にすると跳躍……そのまま、脚にエネルギーを溜めると地面にスタンプ。それだけで、一帯にクレーターが出来上がり大地が揺れる。次の瞬間、シノビは跡形も無くなっていた。……されど、愚かな襲撃者はこれで最後ではない。

【仮面ライダークイズ!!】

【ダブル!!】

「……むっ。」

突如、オーマジオウを包む竜巻。それを操るのは『?』マークを頭に冠する印象的な仮面ライダークイズ。本来の戦い方ではないが、ダブルウォッチを使い全身を切り刻むミキサーにオーマジオウをか

ける。恐らく、並大抵の仮面ライダーならひとたまりもないだろうが
…

「ふんっ!!」

これで、時の王者に届くと思っっているなら片腹痛い。軽く祓うだけで竜巻は掻き消され、オーマジオウが手をかざすと衝撃波でクイズは廃墟へと叩き込まれる。

「……さて、まだやるか?」

【仮面ライダーキカイ!!】

【ゾルダ!!】

【G4!!】

【ロボライダー!!】

さて、全てはこのための陽動か。仮面ライダーキカイ……ウオツチの同時3つ起動という荒業をやったのけスパナが交差したようなデザインのマスクから異常なほど赤い光が漏れていた。直後、メカメカしいボディから次々と当初の設計規格を無視したであろうパーツが出現して巨大なミサイルポットを幾つも展開し火を灯す。文明が産み出した叡智の炎を宿す弾頭は最後にして最大の切り札として放たれる!

「終わりだ、オーマジオウツ!!」

「…」

少しだけ驚いた… キカイのマスクの下から聞こえた声が女のものだったことに。自分を呑みこもうとするミサイルの山よりよっぽど…

ドオオオオオオオオオオオオ
!!!!!!

立ち昇る爆煙。半径10メートルは消し飛んでいるであろう威力だ…ひとたまりもないとキカイは勝利を信じはじめていた。しかし、

「ふむ、これで届くと思われたなら舐められたものよ。」

「!?」

…無傷。

たかが、歴史の一端をぶつけたところで平成の英雄の歴史を背負う王に敵う道理無し。塵と煤を軽く祓いながら黒い煙から現れたその姿は魔王と言つて間違いない…されど、立ち尽くしては死が待つのは当然。再びキカイはウオツチを…

「くどく。」

「!!」

起動する前に握った手ごと握り潰されていた。そのまま、オーマジオウから回し蹴りを叩き込まれ、ゴロゴロと地面を転がされ変身は解除された…そして、驚いたことに素顔は本当に女性だった。

「……機械か人間かはさておき、」

気になるのは一点。遙か昔の『オーマの日』からこの手の輩…俗に言うレジスタンスは数えるのも厳しくなるだけ相手をしてきたが、今回はいささか奇妙。装備が今回に至ってはこの時間軸には存在しないはずのライダーシステムやライドウオツチまで…最早、吹けば

消えるような連中が一体何処から…

…考えられるとしたら、自分が魔王になるキツカケ…オーマの日に権現した『時代を否定する者たち』。自分の力のルーツも厳密には彼等から来ているが、奴等は完膚なきまで叩き潰しこの間でついに残っていた幹部も抹殺した。もうバックアップする者もないはず…

「……………む？」

されど、砂塵の彼方から魔王の前にたちはだかる人影たち。それぞれがジクウドライバーを巻き、ライドウオッチを持っている……。彼等のまとう特徴的な衣も見覚えがある…そして、察した。

「成る程、若き日に退けたのは…所詮、氷山の一角に過ぎなかったということか。」

奴等が望むのはオーマの日の続き、オーマジオウという障害の排除。自分たちの認める結末まで止める気はないわけか……

……………ならば、王に逆らう狼藉者はどうすべきか。

決まっているだろう、かつてのように振じ伏せるのみ

「貴様らがどれだけいようと関係はない。最高最善にして歴史の終着点……ここから始まるものはない。私も…お前たちも……。さあ、とく失せよ。死にたくなければな！」

この本によれば、2068年：平凡な高校生だった常磐ソウゴはオーマの日に世界を救い、時の王者オーマジオウとして君臨していた。

しかし、その玉座は時の果てを超えてきた仮面ライダーたちにより崩壊してしまう。

玉座を追われた王は平成ライダーの力を失い、何処かへ敗走し消えたと彼等に処刑されたとも言われている。

2019年から君臨した最高最善の魔王、時の王者の最期は実に過ぎてみれば呆気ないものだったとのこと。……そのあとの世界がどうなったかは誰も知りませんが、ここから語るのは別の西暦のお話。

……さあ、ここからが新生せし王の話の幕開けです。

XV. after / 20XX 前編

……世界を揺るがす事件があった。

終末を告げる巫女・月落とし フィーネ

世界解体を目論んだ錬金術師 キャロル

原始の人にして、人類の祖。 自らを創った神へ復讐しようとした

男 アダム

人間を世界を創り、その全てを支配しようとして現代に蘇った旧き神
アヌンナキ シェム・ハ

……
これが、戦姫絶唱シンフォギアの歴史である。そして、戦場を駆け
けた少女たちの物語は星空の約束を果たしたことにより幕を引く
……

……しかし、紡いだ祈りは新たな呪いを産み出すことになるとは
かつての戦乙女たちは思わなかった。

「……哀れな者だな、リントという者は。」

林の中に立つ景色には不釣り合いな赤いドレスの女が眼を細めて空を見ていた。空には砕けかけた月……地からはすでに力を失った神の柱……これが何を意味するかは人間は何も理解していないのだろう。

「許されない……リントが神に近づくことなど……」

そして、そのために『我々』がいるのだ……

背後に蠢く異形の黒い影、舞い散る薔薇の花弁が狼煙の代わり

「……これより、『ゲゲル』をはじめる。」

☆☆☆☆☆☆

「……雪かぁ……」

……また積もりそう。なんて思いきりながら立花響は曇天を見上げ

る。さしていたビニール傘も真っ白になり、息も白くなるほど寒い
不思議と震えないのはやはり隣に大切な人がいるからだ。

「響いゝ、買ってきたよ〜」

「待ってました!」

コンビニから出てきた親友、小日向未来…その手に持つそれに歓喜
の声をあげる。拳よりちよつと大きいかくらいの紙にくるまれた白
いほかほかとしたもの… 彼女の胃袋な待ち焦がれていた相手。

「わーい! ほかほかオーソン肉まんちゃん…!! 逢いたかったよお
…!! でも、すぐお別れしちゃうけど…」

「もう、響ったら大袈裟な…」

未来に苦笑されながらつく帰り道。こんな他愛ない日常…これが、
かつてシンフォギアを纏った少女たちが勝ち取ったもの。幾多の戦
いを経てやつと得た平穏…

「あれからもう、1ヶ月以上か…」

「はいね。」

アヌンナキ シェム・ハを打ち倒したのは1ヶ月も前。全ての元凶
の粉碎…旧き神からの独立を果たした人類。その際、全てのシンフォ
ギアは自壊しこれを契機に戦乙女たちはただの少女に戻っていた…。
ある者は日常に、ある者は歌を舞台に響かせに、ある者は自分の夢
を追いかけに…

…きがつけば、激槍を胸へと宿す前のあの頃のようにふたりきり
「…翼さんやマリアさんたちに会えなくて寂しい?」

「……………うん。」

翼とマリアは芸能活動に勤しむため、S・O・N・Gには戻ることは殆どなくなり… また響や未来も本部にはあまり近づくことが出来なくなつた。理由は簡単…

「おふたりとも、さがしましたよ。」

「！」

目の前に現れる黒づくめの女。サングラスからの眼光に思わず怯む未来… まあ、来るとは思っていた。

「行動制限のお話は再三しましたよね？」

「あはは… いやあ、どうせついてくるなら問題はないかなあとつい…」

「こちらの指示に従わないなら、実行使や現在の生活を放棄させて拘束させることも出来ますとお伝えしましたよ。 いい加減にしてください。」

黒づくめの彼女は国連の人間…S・O・N・Gの者ではない国連組織の一員。女性らしい装飾などいらないと切り詰めたような立ち振舞いとセミロングの黒髪。一言で表すなら『鋭い』…そんな彼女の目付きと雰囲気は何よりも苦手だったふたり。だから、こっそり距離をとった秘密の外出だったのだが…

「わ、私が悪いんです！ 響は別に…」

「おふたりとも等しく悪です。そして、監視対象を一時でも見失つた私も責任を問われるでしょう…本当に控えてください。お願いします。」

「…はい。」

こっぴどく叱られてしまった。世界を救った英雄とは聞こえはいいものの、彼女たちのエンドロールは幸せに暮らしたとき…めで

たしめでたしという甘つちよろいものではなく、あまりにも辛辣で冷たい処遇。装者は未来も含めて皆が監視がつき事実上の軟禁状態が続いている…。便所と風呂以外はこの黒づくめの彼女がついてくるのだ…。本当にうんざりするほど。

「車をつけてます。 宿舎に戻りますよ、いいですね。」

仕方ない…観念して、と思った矢先に響が足をとめた。

「あー！」

何に気がついたのか…：駆け出した先はとあるビル。その壁にもたれかかる人影。黒い膝にまでつくようなコートはボロボロで黒いフードで顔は隠れている…だが、顔には傷跡が見てとれ齢もそこまで自分と変わらないだろう。道行く人は避けていつているが響はその顔を覗きこむ。

「あの…：… 大丈夫ですか？」

「…」

察するに、高校生かそのあたりの青年。事情は概ね予想はつく…：ろくに反応することもないことから心身ともかなり消耗しているのだろう。なら、せめてと一口かじった肉まんを千切って半分を渡す…：

「食べかけで申し訳ないですが…」

「…」

「これ食べて元気をだしてください。あと、炊き出しは向こうでやっていますから。」

青年は特に反応はなかった。しかし、響は強引に握らせその場を立

ち去ろうとする……が…

『王』に施しは不要……」

「！」

足を思わず止めてしまったのはやっと青年の口から発せられた声は歳相応にはあまりにしわがれていて重かった。ただ一言で、後ろから矢を射られたように……

「だが、民からの善意は無下にはしない。これは気持ちとしてありがたく受け取ろう……少女よ、この気持ちの分は褒美として必ずつかわずぞ。」

は、はあ……王？ 想定外のリアクションに大抵のことなら笑って済まず響もその不気味さから逃げるように親友の元へ戻った。その入れ替わりたちかわりで独特な灰色のローブを纏う青年が現れる。膝をつく様子からさながら従者だ……

「我が魔王。」

「ウオズか……」

「…は。 追っ手は撒きました。一時とはなりますが隠れ家を……それは？」

「ああ。民からの善意だ。」

☆☆☆☆☆☆

「……ところで、ガードさんの名前はなんて言うんですか？」

帰り道の黒車の中、唐突な後部座席からの質問。運転手を務める黒づくめの彼女は特に驚くような素振りもなく淡々とハンドルを握っていた。これに反応することは自分の仕事に含まれてはいない…答える義理も道理も無し。勿論、必要性もない。

「響……」

「いやあ、でもずっと『ガードさん』だといいい加減、呼び辛くて…」

ガードさん…ボディガードからとってそう彼女たちから呼ばれている。いつからか…割りとその任務についてすぐだったような。最初は恐る恐るだったが今は何かある度に『ガードさん！ガードさん！』…挙げ句の果てに他の周囲からもそう呼ばれる始末。顔には出さないが微妙に腹がたったので最初は無言で威圧していたが、効果があったのはごく数日で全く物怖じしなくなった。

「うちの響が失礼を……」

「護衛対象との必要以上のコミュニケーションは職務に差し支えま
す。控えてください。」

「護衛対象じゃなくて、私の名前は立花響です！ はい、私の名前は教

えました!! さあ、ガードさんの番ですよ! ワツツ・ユア・ネエエム??」

本当にコイツ鬱陶しいな。片割れが必死に止めようとしているが、まあ無駄だろう。確かに職務上、名前を教えるのは本来はNGだが……

「ユキナです。 ……名前はカタカナで『津上ユキナ』。」

「ユキナさん…? おお意外と可愛い名前……」
「響!」

もう面倒くさい。こうやってまた余計なことをしてしまう自分にも嫌気が差す……。これも上司にバレたら大目玉、いやもう今更か。畜生め。

「これで満足ですか? これ以上のことは話す気は……」

「ユキナさんはいつからこの仕事をしているんですか!?!」
「…」

子供は別に嫌いじゃない…だが、理解しないクソガキはとてつもなく嫌いだ。最近、追加した。ピキツとたつ青筋に気がついた響は流石にまずいと慌て引っ込む。

やれやれ…小さく溜め息をつきながらまた落ち着いて運転に戻る。全く、少しはこちらの気持ちや事情は汲んでほしい…

……彼女をはじめとした世界を救った戦乙女たち。人類の相互理解を阻むバラルの呪詛は消滅して、全ての人類を異形へと作り替えよ

うとした邪悪な神は倒された。

おとぎ話、よくあるRPGゲームではめでたしめでたしの後にエンドロールに入るパターンだが現実にそんなものも2周目から新たにはじまるセーブデータもない。生きとし生ける者の命は続く……『それが幸せに暮らしました』とは現状、そう言い難いもの。

…まず、今までS・O・N・Gの司令を務めていた風鳴弦十郎がシエム・ハの件の責任をとらされる形でその任を追われた。理由としては、彼の父親である風鳴訃堂の独断専行によりシエム・ハ復活が行われたことだろう。事態を収拾に全力を尽くした身にはあんなりな仕打ちだが、それで終わりではない。

風鳴の一族に連なる者、協力者…日本政府や国連組織といった者たちが次々と排除される。S・O・N・Gの司令は今別的人物が就き、リディアン学院の教職員も一部が配置がえで姿を消した。

…次に、シンフォギアといった異端技術。神をも討ったその力は地球を救うと同時に役目を終えたかのように崩壊。破損状態から必ずしも修復できないわけではないが、神獣鏡のファウストロップも含めてそのまま封印された。唯一シンフォギア修復が可能なエルフラインも何処かに連行され行方知れず…時を同じくして装者たちにはそれぞれ黒服の監視役がついた。

更に、最悪で災厄なのは

「…ッ!!」

キキイ!! と唐突なブレーキ。後部座席から悲鳴があがるが、別にわざとではない…。いきなり、車線上に人影が出てくれば誰だって急ブレーキをかけるのは当たり前だろう。路面が完全に凍結してなかったのがせめてもの救いか…。 いや

「みつけだせえ、シンフォギア装者!」

彼女たちにとっては最悪の悲運。ローブを纏うこの男は今は自殺志望者ではない…響は知っている。

「行け、アルカ・ノイズ!!」

「錬金術師!?!」

錬金術師…秘密結社の残党。最早、自らの本懐を目指す力は無くともまだ異端の力を操ることが可能な者たち。キャロルやアダムには爪先にも及ばないが、一般人には十分過ぎるほどに脅威。ジエムをばらまくと、大量のアルカ・ノイズが出現し車を取り囲む。

「…ここは私がッ!」

「いいえ、掴まってく下さい!!」

車外に出ようとする響より先にアクセルをおもいつきり踏むユキナ。形振りかまってはいられない、全開のスピードで錬金術師を跳ねとばすつもりで車をとばす! 錬金術師は咄嗟にかわすが、ただ見送るわけはなくアルカ・ノイズに命令を下す。

「追え!!」

猛禽のような飛行型を筆頭に次々と追っ手にかかる異形の群。邪魔になる人も、建物も、何もかもを分解しながらただ命じられるまま獲物を追う…

最悪の災厄。失墜した錬金術師のテロリスト化

アルカ・ノイズはノイズには及ばないが、十分な脅威でありそれを扱える錬金術師は秘密結社が倒れた今もまだ多く存在する。秘密結社崩壊こそは錬金術師の活動母体を崩す上で致命的な一撃になったが、かえってこれがいけなかった…。最早、自らの命題にすらたどり着けないと悟った錬金術師たちの一部はアルカ・ノイズにより破壊活動をはじめようになったのである。

そして、対抗手段かつ抑止となったシンフォギアが失われたことにより活動が活発化…。世界は安定・理解どころか再び混沌へ舵をきりだしていた。

…力を失った戦乙女たち。少女たちは胸に思わずにはいられない。

果たして、自分たちが起こした奇蹟は意味があったのか

XV. after / 20XX 後編

アルカ・ノイズとのカーチェイスは凄まじいものだった。対向車線や渋滞、歩道など気にしないといわなければかりのユキナの運転は追跡者と共に建造物や人的被害も振り向けば戦場跡といった具合で凄惨そのもの。しかし、構ってはいられない…形振りかまっついては間違はなく自分どころか護衛対象も炭素分解待った無しだ。

「本部、応答してください！ 錬金術師からの攻撃を受けています!! 応援を……」

ドリフトをかけながらも無線で応援を頼む… その間も突撃してくるアルカ・ノイズの攻撃を避けているのは流石と言わざらえないだろう。しかし、このままではジリ貧なのは確実。

「降ろしてください！ 錬金術師の狙いは私達です！」

「黙ってなさい、舌を噛むぞ!!」

呑気なことを言う護衛対象、それが可能なら苦労はしない。ナビに指定されたポイントに意地でもたどり着かねば……

「ぬううう!!!」

市街地を駆け抜け、あと少し… 近くの港にさえ入れれば… ドリフトしながらアスファルトを砕く攻撃をストレスで避け、エンジンに悲鳴をあげさせながら目的地へつつ走る！

……あとちよつとで

『よつと。』

積まれたコンテナが見えたその時、ドシヤア!!と衝撃が走り車体がスピン。一瞬、車体が『何か』が蹴ったような気がしたが確かめるより早く車はコンテナに叩きつけられ大きくめり込んで大破してしまふ。巨大なバッドで全身を殴られた衝撃で一氣に意識を失いかけるが、飛び出したエアバッグのおかげと今までの経験のおかげで何とか倒れずにはいる響。

「み、未来……」

「私は平気……それよりも……!」

「……!」

未来も辛くも無事だった……しかし、それは前から車がコンテナにめり込んだからであり即ち運転席は更に悲惨なこと。エアバッグを真っ赤に濡らして動かないユキナの姿がそこにある……車体の前部が潰れて歪んでおりこれが衝撃の凄まじさを物語っていた。

「ユキナさん!」

ドアを蹴つとばして開け、未来と共に外に出る響。一目でわかる命へ達する寸前の大怪我……呼び掛けにも反応がなく白い肌をダラダラと流れる血は止まらない。一刻もはやく治療しなくては命に関わる……

『おいおい、安全運転はドライバーの基本だろ?? 全く小さい子どもとかだっただらどうするんだ?』

そんな彼女たちの前に現れる紅い『怪人』。ノイズではない、機械的なボディに煙突のような角：顔面を覆うコブラのようなバイザー：明らかな意思を持つ異形がふざけた様子でこちらへ歩いてくる。

『よ！ シンフォギア装者諸君。俺の名前はブラッドスターク：以後、お見知り置きを。』

「錬金術師：：？」

『：：そう見えるか？ まあ良いや。』

『ブラッドスターク』と名乗る謎の存在。直感的に判るのはその力はシンフォギアや他の聖遺物と違うまるで異質なもので、彼は『敵』であるということ。車がスピンした原因も間違いなくコイツだろう。

身構える響だが、抗う手段が無いのはお見通しでヘラヘラとしながら怪人は距離感を詰めていく：：

『：：俺はお前たちにちよいと聞きたいことがあつてな。

この地球の唯一神であるシエム・ハをお前たちは倒し：：そのあと世界をどう思う？ バラルの呪詛は消え、意識は繋がり、奇蹟を起こした：：それで？

人間は何か変わったか？

少しは賢くなったか？

相互理解なんて出来たか？

………何一つ変わっちゃいないよなあ？ 相も変わらず誰かを妬み、疑い、呪わずにはいられない。』

「そんなこと……!!!」

『じゃ、その胸に引つ提げたものはなんだ？……その爆弾は新しい呪いそのものだろう？』

「！」

ブラッドスタークが指差す先……響の胸にしまつてあるのはシンフォギアの代わりだが、それは誰かを護る撃槍でも破邪の鏡でもない。この黒い塊は世界を成す人々が戦乙女に課した枷であり『呪い』。もうその人智を越えた奇蹟が自分たちの預り知らぬ場所で起こることがないように、自分たちに向けられることがないようにと恐れがつけさせた火薬の塊。ボタンひとつで簡単に人間の首など吹き飛ばす万一への保険。

未来も含めて、全員にかせられた世界を救った代償である。

『なあ……お前たちが世界を救った意味は本当にあつたのか？ 平凡な日常なんて来なかつただろ？』

…違う、と心は叫びたかつた。 それでも、人間は前に進んでいると胸を張リたかつた。

でも、全てはブラッドスタークの言うとおりだった。バラルの呪詛が消えても尚、人は歩み寄れず……奇蹟すら怖れ、あまつさえ首輪をつ

けたのである。何も反論出来ることがなかった…

「…でも、……それでもッ！」

『でも、なんだ？ まだ信じ続けるか？ いつかは…またいつかはと何度続ける？ お前の起こした奇蹟は無意味……いや、新しい災厄を招くだろう。立花 響、お前は世界を救ったんじゃない、地獄の中へ放り込んだんだ。』

「！」

「響、きいちゃ駄目！」

未来の悲鳴が遮ろうとするが、魔の声は揺れる心に着実に手を伸ばし、爪を立てようとしていた。振り払おうとしても既に蛇に締め上げられるように苦しくて動けない……

…ならばと、蛇は頭から哀れな少女を丸のみせんと最後の一押しをかけ

『なあ、教えてくれよ……ん？』

「その娘から離れなさいー！」

その時、ババババ…!!と凄まじい銃撃がブラッドスタークを襲い、青いロボットのような人影が突き飛ばした。赤いメカメカしい複眼に銀色に輝く角…それが『仮面ライダーG3』と呼ばれていると知るのは暫く後のことだが、この機械の戦士は右腕にブレードタイプの武器デストロイヤーを展開すると、高速振動する刃で顔面を斬りつけた。

『…ぐっ。邪魔がはいったか。仕方ないまた会おうぜ…チャオ♪』

「! …待て!？」

手痛いダメージ…というわけではなさそうだが、傷口を押さえ撤退するブラッドスターク。追おうとしたG3…しかし、未来の悲鳴と喪失状態の響に気がつき踵を返す。

「響、しっかりして!」

「私だ…私のせいで…」

「立花響! …しっかりなさい!! 私よ!」

駆け寄るG3はマスクのスイッチに指先をかけると、装着が解除されて素顔が露になる… そう、それは響と未来がよく見知った顔であり、いつ以来顔ぶりの再会…

「マリア……さん…?」

髪は結っているが間違いない…アガートラムの装者であり、かつて共に世界を救った仲間である。

☆☆☆☆☆☆

……S・O・N・G・本部

かつて、世界を護る切っ先だったこの場所はある意味では響や装者たちのもうひとつの帰る場所だった。過去形なのは最早、その場所には見知った顔は誰ひとりとしておらず、代わりに国連から派遣されたエージェントたちが就いている。無論、彼等は熱や情に振り回されることはなく厳正に装者たちを監視・拘束するためだ。かつて、世界の危機を救うため装者と奔走したこの潜水艦がこんな役回りになるとはなんと皮肉なことか…

「さて、困ったことをしてくれましたね。始末書…では済まないですよ？」

今、風鳴弦十郎が座した司令の席にいるのは細身で中年…サンングラスをかけた男。名前は『北條 透』…年齢は先代司令とそこまで変わらないだろうがスーツ姿に覇気はない。ただ、独特の冷たい雰囲気や響や未来は苦手だった。

「あの……ユキナさんは……」

「集中治療室です。意識が戻ったとしても植物状態……善くて身体に麻痺が残るか。何にせよ、もう普通の日常生活すら難しいでしょう。」

「……」

ユキナは重傷で最早、復帰どころか回復不能なダメージを負った。集中治療室で今も尚、施術は続いており余談は許されない……。北條は淡々と告げるが、当事者の響に言葉は重くのし掛かる。

……自分のせいだ。自分が勝手に動いたから彼女は……

「然るべき処分は後程。説教なんて無駄な時間もかけるのも惜しい。マリアさん、貴女は彼女たちの監視を任せます。」

「良いんですか？ 私も厳密には…」

「人手が足りないんですよ。ただでさえ忙しいのに、下らないことに割く人員は存在しませんから。」

「了解しました…。」

北條に任されたマリアに連れられ、司令室を後にしようとする響と未来……が、『ああ、待つてください』と北條が呼び止める。

「改めて忠告しておきますよ、立花響さん。貴女の手にもうガングニールは無い……」

……もう貴女に救える者は、何もありません。それをゆめゆめ忘れないようお願いしますよ。」

「……！」

未来とマリアはすぐさまくっつかかろうとしたが、響が手を引いて制す。そして、小さく『わかっていきます……』と呟いて去っていく。

その小さくなった背中では世界を救った戦乙女とは、もう誰も信じはしないだろう

知らなかった想い／忍び寄る影

…S. O. N. G. 食堂

「ぎ、取り敢えずおじさんの奢りだぞ、お嬢さん方。だから、元気だ
しなつて。」

「ありがとう、マスター石動。」

響と未来は MARIA に連れられやってきたこの場所も、かつては団欒の場所だった。今は装者も職員も居ない代わりに『石動 惣一』という男がこの食事所を任されている。中年のひょうひょうとした掴み所の無いサングラスの男：それでも、装者たちに態度ではかなり緩和な風変わりな人間。今も、少女たちに善意たつぷりのカレーライスをふるまってくれている。

…響もその手先は鈍いながらも、一応は口に運んでいる。

「それにしても、大変だったな。正直、お嬢ちゃんたちに作戦のことを話さなかった北條司令にも問題はあろうと思うんだがねえ…」

「それを言ったら、私にも責任はあるわ。北條司令の下手に情報を広めて、敵に気取られ無いようにしろという意見に賛同したのも事実だし……」

「MARIAさんは…悪くないです。悪いのは…」
「…響！」

ああ、こりやあ完全にネガティブモードだなあ…と惣一。

実は、今回の事に至る前…既に響たちが錬金術師たちに目をつけられていることは事前に掴んでいた。故に、錬金術師と戦った経験があり、年長者である MARIA が仮面ライダー G3 の編成部隊『G3ユニット』へと参加させられ、逆に奇襲し返す形で、そのまま一網打尽にするつもりだったのだが… 敢えて、響たちに何も伝えなかったこと

が裏目に出てこの有り様。落ち込むというのが無理だ。

「ノイズに錬金術師、神様……ついにはまた怪人。世界は呆れるほど、平和にならないもんだ。やれやれ……」

「私が悪いんです。私が……」

「しつかりなさい、響！」

マリアが渴を入れるも、まともな反応は無い。重傷だ……見かねた惣一が口を開く。

「立花響、お前が落ち込むのは勝手だ……だが、それで誰が報われな
いと思う？ ……ユキナちゃんさ。」

「ユキナちゃんはな、お前たちには冷たかったかもしれない。だがな、
北條司令に同じ女であり、リディアンの後輩でもあるお前たちに、適
任だと自分からかって出たのもユキナちゃん自身だ。それで、時間の
合間を縫っては、お前たちの拘束を解くよう報告書をあげていたんだ
ぞ……。自分の寝る間も惜しんでな。」

まさか……。近づこうとしてもよそよそしく、今までずっと距離を
とられてきたのに？

未来すらも驚きを隠せないでいたが、マリアが捕捉をする。

「ユキナさん、確かにリディアンのおBのひとりだったわ。紆余曲折
あって、国連のエージェントになったみたいだけど……貴女たちを同
じ学舎の後輩として気にかけていたのも事実。距離をとっていたの
も、自分の報告が客観性を失ったものじゃないと訴えるため。不器用
な部類の人だったけど、根は優しい人だった。」

「本当に……？」

「ああ、俺とマリアはこの食堂でよく見てたからな……」

優しさとは甘い言葉、慰みの言葉だけではない。時には、知られずとも影から支えることもまたひとつ…響たちは寡黙な仕事人間ぐらいにしか思っていないかった。もつと、笑えば良いのに…なんて、呑気なことすら考えていた。

否。…：自分は何もわかっていなかった。彼女がどれだけ自分を想っていたのかを

「…：私は…：…何も知らないで！」

「そうだ。ここでお前が潰れたら、ユキナちゃんの怪我した甲斐も意味もないってわけ。生きてるなら、託された想いの責任ぐらい…：わかるよな？」

更に、積み上がる自責。でも、今度は胸の奥で強い感情が踏み留まらせる…：まだ、折れてはいけなないと。

そんな彼女を見かねてか、マリアはある資料を取り出した。

「貴女が、もし踏み留まららないと言うのなら…：再び戦場に戻る覚悟があるのなら、これを渡す。」

「！…：…：これ…」

資料に書いてあったのは『G3ユニット計画について』と書かれていた…：G3…：それは、マリアが纏っていたシンフォギアに代わる科学の盾、人類が古代の遺物に抗うための刃。これを見せるということ、響にG3ユニットへの参加を提案しているのだ。しかし…：でも、と彼女は釘を刺す。

「あくまで、これは選択肢のひとつ。平穏な日常を過ごしたいという思いも間違いじゃない。強制するものじゃないし、するつもりもない…：しっかり考えて、自分で決めなさい。」

…：過去は戻らない、事実は変えられない。だが、星明かりの夜道

のように示される選択肢。もう力を失い嘆く少女ではなく、かつての光を瞳の中に取り戻しつつあった。

(……さて、俺も捜さないとな…アイツらを。)

一方、惣一も何か考えている様子だったが…少女たちは誰も気がつかなかった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「はー、疲れた。ただいま〜」

ブラッドスタークは吹き抜け天井の邸に入ると、リビングのソファーにドカッと座って寛ぎだす。そして、変身を解除するとテーブルの上に赤金のライドウオッチを投げ出して予め、買っておいた缶

コーヒーの口を開ける。もう遅めの時間で、部屋は薄暗いがこれくらいが丁度いい…。

「ふい〜 染みるう〜…」

今日もこのために生きている…なんて言うとおツサン臭いが『白髪の青年』は構わないとグイツと缶コーヒーを飲む。同居人にはこの中性的な声に似合わないと言うが…

まあ、良いさ、どうせ今は自分以外は誰もいない…

「守備はどうだ？」

「…つつ!? 王様、いたのかよ!?!」

いや、2階のテラスに人影。『王様』と呼ばれたそれは暗闇のせいでは顔は見えないが、まだ若い青年のように見える… 腹にはジクウドライバーを巻いており、シルエットだけが1階のリビングに揺らめく。

青年と王様は同居人で、協力者…それでいて、友人であり上下関係は無い。その点はお互いに気にしていないからだ。

「あー、うん、そうだな。やっぱり、ライドウォッチとやらはまだうまく使いこなせないな。まさか、ブラッドスタークの方だけを切り離して逃げられるなんて思わなかったよ…。」

「ふん、流石、お前の…。」

「王様?。」

「おっと、失言だったな。」

一瞬、青年が牙を剥く猫のような顔をしたので、謝る王様。寝床が同じ分、互いの尊重も忘れない…うっかり、相手の地雷に足をかけてしまったなら尚のこと。

少しすると、青年はまた缶コーヒーに口をつけ気分を落ち着かせて

話を続ける。

「……あと、立花 響だっけ。あれは多分、当たりかな。錬金術師をけしかけてみたんだけど、あの小娘の周りには、ライダーの力が集まりつつある。時期、王様がお目当ての『魔王』も現れるんじゃない？」

「……そうか。」

報告を一通り受けた王様は、何か考えるような仕草をすると黒いライドウオッチを精製して、1階リビングへ浮遊させて青年に渡す。これを受け取った青年……すると、ウオッチは変質して『赤いトリガー』のようなアイテムへと形を変えた。

「そのハザードトリガーには、俺の力の一部が宿っている。…幾つかの仮面ライダーの存在はこの世界に癒着し……既に幾つか独自の動きをはじめた。厄介事になったら使うと良い。」

「優しいねえ、王様は……。」

青年はほくそ笑みを浮かべ、缶コーヒーにドス黒いヘドロのようなエネルギーを注入すると、缶が禍々しい『アナコンダ フルボトル』へと変化した。それを、テーブルに置くと他にも蛾のエンブレムが刻印された『モス』、肉食恐竜の顔が刻まれた『レックス』のボトルを置いた。

それらをコレクションのように眺め、ぼそりと呟く……

「……………仮面ライダーなんて、皆死ねば良い。」

☆☆☆☆☆☆☆☆

「……今夜は不吉な風が吹く……。」
「我が魔王？」

その頃、星空の下……何処かの空き家で夜空を見上げる青年。従者が心配そうにする中、不意に彼は歩き出す……
…まるで、見えない者に導かれるように

運命の針は廻りだす。

Are you ready? / 招かねざる者 I

荒れ果てた荒野で佇む『墓守』の影。 ……金色と黒の装飾は魔王
と言っても差し支えないが、本質は自分が葬った『平成』という時間
の…時代を駆け抜けた英雄たちの墓を守っている。

その墓守の名はオーマジオウ。

最高最善を目指した、最低最悪の魔王。 ……この2つ名は人々が
つけたもの…でも、真実はこの荒野こそが彼の限界だったのだ。皆が
望む最善には届かなかった故の最低最悪、それはもう今でも側にいる
従者しか知らないだろう。

……そして、オーマジオウは今…追い詰められていた。

「ぐっ！」

片膝なぞいつ以来か… 古びた道路のアスファルトを抉りながら
舌打ちした。未来予知が何故、反応しなかったのかは謎だがそれだけ
今回の敵は強い…レジスタンスの比ではない、自分と同系統の力を持
つ仮面ライダーたち。ビルや瓦礫の上に立つ影は7人…成る程、
『栄光の7人ライダー』と掛けているのか！

何人かは見覚えがある…… 金色の戦士 『仮面ライダーバールク

ス』に、異形なる者 『仮面ライダーゾンジス』、『獣の騎士 仮面ライダーザモナス』。忌まわしき、最初に若き自分の前に現れた滅びの使者。

この時間軸ではとつくに倒しているから、ジクウドライバーとウオッチを別人が使っているのだろう。

問題は残りの4人。 ……ジクウドライバーを使つてこそいるが、自分の知る仮面ライダーではない。そして、コイツらが滅法強い。腕には平成ライダーのようで、微妙に違うウオッチが嵌められている …… 奴らの新型のライダーか？

「喪失した異聞の歴史から産まれたウオッチ…。 正當に刻まれた歴史の集合体という私には猛毒、癌細胞も同然というわけか。」

「それだけじゃない、数も平成を遥かに上回っている！ お前の平成などちっぽけなものだ!!」

バールクスは勝ち誇つたように叫ぶと仲間のライダーからウオッチを吸収して虹色の輝きを放ち、拳へ燃えるようなエネルギーを集中させる。一方、オーマジオウも同様に金色のエネルギーを拳へと込めた ……

「ふん、平成を啜うか…。 愚かな、燃え尽きた歴史の灰を集めたところで、どうにもならん。」

「それはどうかなあ ……常磐ソウゴオ!!!」

駆け出す両者 ……直後、激しくぶつかり合う拳。その瞬間、世界は激しく揺れ時間が崩壊していった。

……その日、最低最悪の魔王は倒れ、新たなる英雄が産まれたとい

う。

☆☆ ☆☆ ☆☆ ☆☆ ☆☆ ☆☆

「……変な夢を見た。」

宿舎の自室で目を覚ました響。どうも、昨日の影響か妙な夢まで見てしまった。食堂のあと、マリアと惣一に送られて帰ってきた……G3ユニットのことで未来が何か言ってくるかと思っただが、『お互い、今日は休もう……』と持ち越しになった。

今、彼女は自分と同じベッドで寝ている……その頬は乾いた涙の跡がある。やはり、彼女もユキナの一件は精神的にもこたえたのだろう。

……さて、問題のG3ユニット。枕元に置いていた資料はG3システム、仮面ライダーG3について書いてあった。夜中、こっそり見てみたがやはりというべきか、シンフォギアには到底及ぶ代物ではないことは明らか。アルカ・ノイズの攻撃の耐性は無く、その代わりに適応出来る身体能力を持つなら誰でも扱えるのが売り。使用出来る武器も一般の武器より強力でアルカ・ノイズならば充分に対応が可能との話。

要は、パワードスーツか……

「……ガングニールでなくても、誰かを守れるなら……。」

ドンドンドン

「ん？ 朝から誰だろう…」

まだ朝は早めの時間帯だが、ドアを鳴らす音。かなり近所迷惑な勢いで、未来も目を覚ます程である…。寝間着なのだが仕方ない…。もしかしたら、国連の人かも…ユキナを悪く言うつもりは無いが、こつちの事情は考えないし。

「響先輩！」

「私達デース!!!」

「おいバカ、生きてるか？」

…！ 聞き覚えのある声にすぐベッドを飛び出した！

すぐにドアの施錠とチェーンを解いて開けると、そこにはもう何年ぶりとも会ってなかったとさえ思える戦友たちの姿が。『月読調』に『暁 切歌』コンビに『雪音 クリス』…昨日も確かにあったが、国連の人間により装者同士の接触は極力控えられていた故に久方以来な感覚すらする。

「皆…！」

「お？ 思ったより、元気そ…おわ?!」

気持ちを抑えられず、クリスに抱きつく響。胸に込み上げる全てが言葉より早く行動になってしまっていた。元よりスキンシップが多めの彼女だったが、この勢いと力…余程、こたえていまのだとクリスは実感する。

「おいおい、アタシに会えたのが嬉しいのは分かるが、一旦離してくれよ…ちよっと、苦しい。」

「あ…ごめん。」

しまった、力を入れすぎてしまったようだ。響が離れると、友人たちの後ろに昨日ぶりの人影。

「よっ！」

「マスター！」

スルーされるかと思ったぞ？ と、石動惣一その人。彼は食堂の管理者である故、クリスたちとも面識があり、自分に気をつかつて彼女たちを連れてきてくれたのだろう。

「一晩寝て、少しは楽になったか？」

「は、はい…」

「そうか。んじゃ、まずお前たちは今日も授業だろ？ 友達も待つてるし、さっさと準備してこい。」

それから、惣一に促されてすぐにバタバタとした朝がはじまる。朝食を昨日の残り物とか白米で速攻で作り上げ完食： 制服を着て身嗜みを整えると再び玄関に。

…そして、通学の道へ女子たちとオッサンひとりがついて歩く。

明らかに他人からしたらおかしな絵面だが、響や未来にとっては違う。久々のまともに会話が出来る友人に、国連の人間では唯一に近く優しい理解者と登校なんて夢のようであった。

「えへへ、ひっさしぶりのきりしら成分の補給〜」

「あぶぶ…!?!」

それ故か、スキンシップもいつもより強め。後輩ふたりにべったりと、抱き締めて嬉しそうにしている。

いつもなら、他所でやれと叫ぶクリスだが今は数歩後ろから黙って

いた。…恐らく、響の精神状態はかなりダメージを受けていたことはこのスキンシップから察せられるからである。

「…あのバカ、相当まいってるな。」

「やっぱり、わかるの…?」

「まあ、それなりに付き合いは長くなってるからな。それに、昨日のこととはマスターが細やかに教えてくれたのもある。」

惣一はクリスたちに昨日の惨劇を伝えていた…恐らく、話しにくい当事者に代わって彼なりに配慮した結果なのか。

…クリスは憂鬱そうに空を見上げる。

「アタシさ、あの時思ったんだ。シエム・ハが倒されて、シンフォギアがぶっ壊れた時…私たちの装者として役目は終わった。少しは世界が平和になるんだって。」

「クリス…」

「…でも、甘かった。神を討ち果たして、バラルの呪詛を解いたところで欺瞞も争いも、何もかもが終わりやしない。挙げ句の果てに新しい敵ときた…。そして、今のアタシたちにはシンフォギアも無い。甘過ぎな妄想だよな全く…」

「…………それは私も同じだよ。」

残念ながらハッピーエンドはジ・エンドではなかった。命がある限り、エンディングロールには至らない。

響と未来だけではない、クリスやきりしらコンビにも『鎖』と呼ばれる爆弾が首につけられている。戦乙女の翼が自由になることを恐れる他ならない、自分たちが救った人間たちの手によって。

…何故、わざわざ救った者たちを自分たちが潰すのか? そんな道理があるわけない。当時の弦十郎をはじめとしたS・O・N・Gの大人たちは訴えた…しかし、何するものぞと、良心であり理解者でもある大人たちは呆気なく、何処かへとばされた。代わりにやって

きた『自分たちを知らない大人たち』。彼等は平然と戦乙女へ首輪をつけ、犬のリードを引つ張る飼い主のように、目の届くところへ縛りつけている。

犬ならまだいい、それは犬の命綱だから。

だが、この見えないリードは見えないほど多くの人間を安心させるための命綱だ。

「はくあ。何だっだろうな…アタシらがしたことはさ。」

「なーに、しけた顔してるんだ？ 年頃の乙女たちが揃いも揃って？」

哀しげに笑む少女たちに、声をかけたのは今まで後ろにいた惣一。優しく、クリスと未来の頭に手を置くとグシグシと頭を撫でる。

「お前たちのしたことは世界を救ったってことだ。決して、無駄なかじやない。多くの人間が救われ今この瞬間を生きている。意味なんてこれで十分過ぎるじゃねえか。それに、ここで折れたら、そこそあのテロリストの怪物の思惑通りだろ？ お前たちは、それで良いのか？」

無意味じゃない。そう他人が言ってくれるだけで、不思議と胸が軽くなる…

そう、救ったからこそ今がある。今を生きてる人も、自分たちが生きてるこの瞬間もある。それに、全ての大人が自分たちに不信を抱いているわけじゃない…惣一や傷つき倒れたユキナもいるのだ。総てを悲観するのはまだ早い…力になってくれる人もいることを忘れてはならない。

「…マスターさん、ありがとうございます。」

「アンタ、割りと良い奴だな。胡散臭いのが玉に傷だが…」

「クリスちゃん酷いなあ。ま、大人としての責任を……」

「……ん？」

ふと、歩を止めた惣一。一行も反応して止まると視線を前へ……

丁度、響たちの行く手を阻むようにひとりの青年が立っている。

……そして、響は気がついた。

「君は……昨日の！」

肉まんを分け与えたあの青年だ。服装は昨日と変わらず、ボロボロのものだが……強く遮る壁であるように存在感を放ちながら、立ち塞がっている。

「去れ。この先は、お前たちの望むものは無い。」

何を言っているのか？ おおよそ歳に不相応なドスの利いた声を出す彼に警戒を示す少女たち…… その時、切歌が気がつく。

「！ ……あれ、煙が!？」

その言葉に反応して、先の空を見ると火事とおぼしき黒煙が立ち上っている……しかも、リディアンの方だ。すぐに、駆け出そうとする響たち。

「行くなと言っている！」

青年が再度警告するも、少女たちは止まらない。走り出したその先で眼にしたのは…

「……！」

燃え上がる学園。悲鳴をあげ、逃げ回る生徒たちの阿鼻叫喚の光景…。あちこちで倒れている中破や大破したG3。しかし、ノイズの姿は無い。その代わりに、暴れているのは…

「ビルドアップ!!いくぞ、万丈!!」

「やるしかねえ!!」

戦う二人の仮面の戦士…… これに相對するのは

「……なんで…」

響は眼を疑う。戦っているのはかつての自分と同じ、激槍ガングニールのシンフォギア。そして、身の丈以上ある激槍のアームドギアを構える山吹色の髪をした少女。

……既に死んだはずの彼女が、ここにいる!?

「……奏さん!？」

天羽奏、先代ガングニールの装者である。

Are you ready? / 招かねざる者 II

……天羽奏、初代ガングニールのシンフォギア適合者。かつての風鳴翼の相方であり、既に故人なのは装者全員が知っている。

そして、死んだはずの彼女が壊れたはずの激槍を扱って仮面ライダーと呼ばれる戦士たちと戦いを繰り広げていた。

「奏さん…なんで……」

響の頭は混乱状態だった……どうして、彼女が生きているのか。何故、封印凍結されたはずのガングニールが彼女の手にあるのか。

そんな彼女に目もくれず、戦い続ける奏。そんな彼女の相手をするのは紅い兎のアーマーの戦士『仮面ライダービルド ラビットラビッツフォーム』に焰の龍の戦士『仮面ライダークロース マグマ』。彼等は一体何処から現れたのだろうか…

「畜生、女の姿晒して…やりずれえな!!」

「ごちやごちや言うな。誰にせよ、こいつもエボルト関連だろ。容赦する理由はない。」

クロースはぼやくも、ビルドは冷静に向き合っていた。今までの前例は無いが、間違いなく自分たちの因縁の敵が関わっているのは間違いないと踏んでいた。実際、自分たちを誘ったのは『奴』…そこで待ち受けていた激槍の彼女。

…で、一方の怨敵。惣一は少女たちの影で死角になりやすい位置から様子を窺っている。

(確かあの娘は先代ガングニールの装者…で、纏っているのは盗まれたシンフォギアの1つか。確か死んだと聞いていたが……)

『よっー!』

背後! 忌々しい声に、振り向けばブラッドスタークがへらへらと手を振っている。これだけで、事態がコイツが原因で引き起こされているのは見るに明らかだった…。怒りが込み上げてくる装者たちに、ブラッドスタークは『やれやれ、そんな顔をしないでくれよ?』と肩を下げる…

『今日は立花響、お前に昨日の答を聞きにきたんだ。覚えてるだろ? 自分の普通の人生を生け贄してまで救った世界…どう思うかだ。どうだ?』

「うるさい! …あれは、…あの奏さんと GANG ニールは一体、何なんだ!」

しかし、響にとって重要なのはそんなことより、目の前で動いている奏と纏う GANG ニールが何なのか。フィーネやシエム・ハの転生とは違う完成な生前の姿などありえない…彼女の肉体は塵ひとつ残っていないはず。対して、ブラッドスタークは不敵に笑う。

『あれは俺の力の一部だ。死者を蘇らせることも、保管庫から GANG ニールを盗み出すことも造作もないことさ。』

「嘘だ、だって GANG ニールは…!」

『バーニングエクストライブでぶっ壊れた。だが、直していたんだよ……国連の連中は裏でこっそりと、いつ来るかもしれない次の世界の

危機のために。だから、あのエルフナインとかいうガキは連れていかれたんだろ?』

「……そんなつ……!?」

奏はブラッドスタークが行きかえらせたもので、纏うガングニールも他ならない響が使っていたシンフォギア。加え、エルフナインもそれに協力させられていたとなれば……

憤る響……そんな彼女に歩みより、再び問う邪悪に怪人は囁く。

『こんな世界、クソみてえだろ?　なんで自分ばかりがこんな目にあうんだ……シンフォギアもごちやごちやも要らない、ただ平凡な女の子で生きれば良い。そう思ったことはないか……?』

「おい、バカ!　コイツの言葉に耳を貸すな!!」

『外野な黙ってもらおうか。』

クリスが叫ぶも、ブラッドスタークがパチンツと指を鳴らせば響以外の動きが止まる……まるで、時間そのものを止められたように。ビルドとクローズも気がついたが、奏のガングニールの前に近づくことすらままならない。

さあ、あとはもう一押し……

『お前には過去も世界も変えられない……だが、未来を変えることは出来る。そのための力ならここに有る。』

惑う少女に差し出すのは無機質な鋼色のストツプウオッチのようなアイテム。それは、仮面ライダーの歴史と力を封じ込めるブランクライドウオッチ……持つべき者が持てば、大いなる力を発揮するカギ。知る由は無いが、惹き付けられる何かに惑わされる手は怯えたまま……

それでも、あと少し……　あと少し……

バァン!!

「響から離れなさい!!」

しかし、突然の銃声にブランクライドウォッチは、弾かれ足許に。それは、半壊したG3を纏ったマリアからの銃撃だった。

仮面は既に壊れたのかしておらず、スーツも亀裂や火花が走ったりと破損が随所に痛々しく目立つ。だが、闘志は衰えず、鋭い眼光が惑わす悪魔を睨む。

すると、ブラッドスタークはゆらりと彼女の方向を向いてスチームブレードを構えた。

『チツ：矮小な人間風情が：邪魔をするなアア!!』

一気に距離を詰めると、荒ぶるままマリアを斬り刻む。G3の装甲は更に捲れあがり、砕け：彼女の顔にはズビュツ!!と紅い一閃が。G3のバッテリーは当に切れているため、ろくな反抗は出来ない：それでも、執拗な斬撃が止むことはなく襲いかかる！ ついには、立っていれなくなり後ろによりけるが、容赦なく襟首を掴まれ持ち上げられた。

『なあ、本当にそんな鉄屑で勝てるかとも思ったか：「この僕に、ほんのチョイと敵うとでも：奇跡が起こるとでも思ったか!!」これが、無慈悲な現実だ。』

「：くっ!？」

怒りを帯びるブラッドスタークの声：その色は徐々に、ダンディィさからまるで、少年のような声へと変わっていく。

ビルドもその異様さに気がついたが、この隙を突かれて奏のガングニールが当たり壁に叩きつけられてしまう。最早、助けは絶望的だった。クルリとスチームブレードがブラッドスタークの手元で回り、マ

リアの顔面ど真ん中へ狙いをつける。

「死ぬといいよ。君のような正義の味方気取りはねえ!!!」

「やめろおおおおおおおおおおおおおおお

!!!!!!!」

その時、響はブランクウオッチを拾いあげ駆け出していた。大切な人を傷つけられた憤怒は、今まで枷となっていた恐怖や迷いの全てを吹き飛ばし、右の掌に握った空の器のブランクウオッチに懐かしい山吹色の光を帯びていく。確かに、それは失われた撃槍の光：再び少女の手の中で甦ろうとしていた…

「うおおおおおおおおおおおおお

!!!!!!!」

突き出される輝く右の拳。流星のような輝きはブラッドスタークの左頬に吸い込まれ直撃。首をガクリと曲げさせる…

しかし、何事も無かったのように動じないブラッドスタークはマリアを離すと何処からか、新しいブランクウオッチを響の眼前に晒す…

オリジナルであり、地球外生命体エボルトでしか使えない代物。そして、その力を繋げるエボルトリガーも既に備えつけられている。そして、更に取り出したのは黒い戦車と歯車のエボルボトル…

「タンク×ライダーシステム!! エボリューション!!!」

ふたつのボトルを接続して、レバーを廻す青年。その周囲には黒い歯車のような模様と淡い青の邪悪な光が漏れだしていた…

軽快な電子音のような駆動音と共に高まるエネルギー。そして、ドライバーは告げる…

「Are you ready?」

「超血。」

「ブラックホール!! ブラックホール!! エボリューション!
フハハハハハハ…!!!」

「!!!」

一瞬、歯車が青年に重なると同時にその姿は『仮面ライダービルドと酷似した黒と金のライダー』に変身した。ビルドと違うのは金の装飾と西洋の甲冑のような外見に、黒い戦車の両眼。メタルビルドと呼ばれる存在が近いように見えるが醸し出す邪悪さは全くの別物。

…その名は

『僕は…ネオタイムジャッカーの一角、オメガ。そして、異聞のビルド。』

……怪人・オメガビルド!!!」

異形、と呼ぶにはあまりにも戦士らしい姿で自らを『怪人』と名乗る者。復帰したビルドもクローズも、眼を見開き驚愕していた……。ビルドであるが、ビルドではなく、そうあつてはならない存在……。それが今、自分たちの前にいる。

ネオタイムジャッカーの『オメガ』、彼が変身する『オメガビルド』。理解は完全に周囲は追いつかない。しかし、急展開はまだ終わらない。

『さあ、救済の刻だ……。立花響。』

「なに……。を……。」

オメガビルドは踞る響に聖母のように微笑みながら、奏を呼び寄せて自分の隣へ膝をつかせる。そのまま、形成したアナザーウオッチを彼女へと埋め込む……

「ぐ……。あああああああああ!!!」

【ガングニール……!!】

苦悶する奏の声が響き、やがて少女の身体は戦乙女を彷彿させつつも禍々しい異形の姿へと変貌していく。

……特徴的な撃槍がごとき、鋭い爪のガンドレット。しかし、あまりの大きさに拳が握ることは叶わない

……背中の翼。まるで掌のようだが、結晶が固まったようでこちらも拳を握るのを邪魔する爪の羽

：胸にあるのは、希望の歌ではない。復讐に燃える心を表すような骸骨の炎

：頭はヴェールを被る双角の髑髏。かつて、戦乙女に倒されたフイーネやシエム・ハを思わせるシルエットだが、眼と口から血涙と吐血のようなラインが描かれている。

『喜べ、今日からコイツが：【仮面ライダーガングニール】だ！』

仮面ライダーガングニール：このままいけば、立花響が至るかもしれないなかった可能性を奪い取り、生まれたアナザーライダー：仮面の資格無き者。

『アナザーガングニール』：異端の仮面撃槍が誕生した瞬間であった。

オーマジオウ／XV. after

『喜べ、今日からコイツが…【仮面ライダーガングニール】だ！』

『…ウウ』

アナザーガングニール…。もし、立花響が仮面ライダーに成ったとしたらという可能性を奪い取り産まれたアナザーライダー。恐らく、響がウオツチに触れなければ、その可能性が権現することは無かっただろう。異形なる仮面の戦乙女、かつて自分が纏うシンフォギアを歪めたような姿と変貌してしまった奏に響は恐怖と絶望で打ちのめされそうになっていた。

そこへ、オメガビルドがそつと優しく声をかける。

『何も怖がることはないよ？ 君の怖かったこと、辛かったこと、全部が無かったことになる。これで君は神殺しでも何でもない普通の女の子に戻れるんだ。』

頬を絹に触れるように撫で、怯えた少女の表情に仮面の下で笑む。悪魔のような行いをしながら、天使をさながら気取るように……

「テメェ!!」

その時、殴りかかるクローズ。しかし、アナザーガングニールの背中から伸びた翼らしき触腕がその拳を防ぐ。かつて、響がサンジェルマンから託されたアマルガムと酷似しつつも、拳を握らず敵を風ぎ払うことに特化したソレは簡単にクローズを振りはらうと地面へと叩きつける！

『ぐはっ』と竜の仮面から息が洩れるが、アナザーガングニールは容赦せず地面にグイグイと捻りこんでいく。そんな様をオメガビルドは嗤う。

『なんてザマだ、仮面ライダークローズ！ それでエボルトの半身とは…まあ、ここで君は消えてもらおうかな。今後のためにもね…』
「なにい!？」

迫りくるまた片方の触腕： 爪先が戦槍の如く尖り、狙うはクローズの頭蓋が

「やめてください、奏さん!!」

しかし、寸前で響がアナザーガングニールに組み付き止める。触腕は逸れたが、今度は響へと注意が向いてしまう…それでも彼女は逃げようとしなない。かつて、悲劇運命の日に自らの命と夢を引き替えにしてまで助けてくれた優しさを持つ彼女なら止まってくれはず！

されど、虚ろな眼は一瞥すると振り払い、響はオメガビルドの胸の中へ抱き止められる。

『無駄だよ、無駄。君の声では、彼女の願いを振じ伏せることは出来ない…。さあ、やれ!! アナザーガングニール!!』

オメガビルドに従い、触腕でクローズを持ちあげるアナザーガングニール。ゆつくりと構える右手で貫くつもりだろう…クローズも抗うが、圧倒的に力負けしてもがくことすらままならない。ビルドもまだ復帰していない…万事休す、そのまま心臓が穿たれ

「そこまでしておけ、異聞のビルド。」

……突然、空気が重くなる。

アナザーガングニールすら不意に全身へ押しかかるプレッシャーに獲物を離し、片膝をつく。オメガビルドも仮面の下で思わず顔をしかめると、響を開放するところらへ歩いてくる青年へと睨みを向けた。

『やあ、『魔王』。邪魔をしないでもらえるかなあ…?』

「黙れ、タイムジャツカー……いや、癌<キヤンサー>。いくら敗者の足掻きにしても、お前のそれは醜過ぎる。」

『…ツ!!』

エボルドライバーのレバーを怒りを滲ませ、回す。一気にエネルギーが充填されオメガビルドの指先にエネルギーが収束され青年を狙う。

【ファイバーツ!! エボルタンクファイニツシユ!!!】

戦車の砲撃、まさにそれなるエネルギー弾が放たれた。それを、身動きひとつせず直撃を受ける青年……。

直後、凄まじい爆発と炎が起き、この場にいる殆どの者が彼の死を悟る。四肢どころか、もう肉の欠片ぐらいしか残っていないだろうと……

「愚かな。」

しかし、そんな予想とは真逆。確かに彼は立っていた
……金色と黒を纏う、禍々しさはまさしく『魔王』として。眼にあ
たる部分には『ライダー』と刻まれた顔に、随所にあしらわれた時計
のような意匠。その存在はこの世界には存在しないはずの平成の仮
面英雄の終着点にして、歴史そのもの…

「最高 最善…… 最大 最強……」

…… 仮面ライダーオーマジオウ

!!!
!!!

仮面ライダーオーマジオウ、最低最悪にして最高最善の魔王…平成
の終着点。今、平成ライダーの歴史無き、シンフォギアの世界に君臨
した瞬間であった。

そして、彼の魔王は手を翳すと衝撃波でオメガビルドとアナザーガ
ングニールを弾きとばし…響へとゆっくり歩み寄る。

「激槍の少女よ、先刻の礼をさせてもらうぞ。」

「…え?」

魔王はピツと指先を動かすと、コンパクトに畳まれた薄い包装紙を
取り出す…丁度、コンビニの肉まんとかを包むやつ…。見覚えがある
…そういえば!この時になって、響はようやく気がつく。

「もしかして、昨日の!?!」

肉まんを分け与えたあの青年。変わった人とは思ったがまさかの
予想の斜め上をぶち抜いている。驚くばかりの彼女だったが、まだこ
んなものは序の口だ…魔王の力はここからである。

【鎧武!!】

「…フンッ。」

ライドウオッチを起動すると、空間がチャックを開けるように避け…そこから、無数の武器が射出されアナザーガングニールを襲う！
触腕を盾代わりに庇うが、刃物の武器は突き刺さり痛々しく血を流す…。されど、魔王に容赦などありはしない。

【アギト!!】

「はあっ！」

次に召喚され、彼の手におさまるのは神に遣える天使すら斬り裂いた焔の刀：フレイムカリバー。怯んだアナザーガングニールに間髪いれず一撃、二撃…傷口は炎が燃え上がり異形の呻きの中に少女の悲鳴が混じる。それでも、オーマジオウは気にも留めない。

『流石、魔王！ 神殺しの力にあえて神の力で挑むとは!! だが、僕のような異聞のライダーに平成の力は通じない!』
「…少し黙っている。」

【龍騎!!】

その勢いを称えるオメガビルドに軽く苛立ちながら、竜の業火を操り彼を呑み込む。倒しきれはしないだろうが、足留めぐらいにはなる… 今はアナザーガングニールの撃破が最優先だ。

「撃槍の少女よ!! そのウオッチを寄越せ！」

「え…」

「はやくしろ！ コイツを止められるのはそれだけだ!!」

オーマジオウの声に圧されてウオツチを差し出す響…すると、ウオツチはふわりと浮いて吸い寄せられるようにオーマジオウの掌におさまり、『ライダー』と刻まれた特有の顔面が浮かぶガングニールウオツチへと変貌する。

「これで、終わりだ。」

【ガングニール!! タイムブレエー…イク!!】

発動する必殺技。右腕の拳に宿る煌めく太陽のごとき輝き…。世界に迫った多くの危機を討ち祓い、ついには神殺しすらやってのけた撃槍の力がとうとう時を統べる魔王に受け継がれた瞬間である…。いや、今回は奪ったというほうが最適か…。

それが貫こうとしているのはその槍のかつての所持者かつ、歪みながらも同じ力のアナザールライダーとはなんとも皮肉なことだ…

アナザールガングニールは咄嗟に防御の姿勢をとろうとするが、岩山と石ころのような存在感の差…防ぎきれないことはいらう。

「消えろ、異聞のアナザールライダーよ。無に還るがいい…。」



…爆風。衝撃。嵐のど真ん中に突っ込まれたようだった。

目は開けていられず、吹き飛ばされないように地面にしがみつくなり。ほんの数秒だったが、這いつくばる間は実に長く感じた…

「…っ」

やがて、全てがおさまり視界が晴れていく…そして、見たものは

「……な…につ!?!」

背部から貫かれていたのはなんと、オーマジオウだった。アナザーガングニールは健在で、新たに乱入した第三者が光の剣で魔王の胸を抉っていたのだ。それは、ジオウ系の緑と金の仮面ライダー…忘れるわけもない…

「…貴様は!?! バールクス!!」

「…」

仮面ライダーバールクス…平成という歴史を否定し、時の管理者を謳う者。

彼は剣を引き抜くと、ガングニールウオッチをオーマジオウから奪

い取り自らのジクウドライバーの空いているスロットに装着。そのまま、ドライバーを一回転させる。

【ガングニール!! タアタイム・ブレエーーク!!!】

「全ては廻り、振り出しに戻る…。常盤ソウゴ、お前は俺の運命の中で永遠に廻り続けるが良い。」

掲げられる右手はギロチンの刃のように… 掌に罪人を裁かんとする光が灯ると死刑執行と振り下ろされた。

神殺しの光は魔王の鎧をたやすく砕き、肉体を紡がれていた歴史の力ごと裂く。…おぞましき断末魔が一带に響かせながら、ウオツチたちが弾けるように四方八方へと散っていき彼の魔王は残っていた僅かな力すら失う。

こうして、完全に玉座から引きずりおろされたオーマジオウ。その途端、時空が激しく歪んでまたしても響は気を失うのであった…